

## 〔15〕 受戒韃度に三迦葉エピソードが採録されている理由

〔0〕最後に「受戒韃度」に不自然な形で登場する三迦葉のエピソードの意味を考えておこう。そもそもこれが本稿を執筆した動機であるからである。

〔1〕「はじめに」に記したように、三迦葉エピソードが記されたもっとも蓋然性のありそうな理由は、「十衆白四羯磨具足戒法」の前提になるサンガのモデルが500人、300人、200人の弟子を持っていたとされる三迦葉であったということである。しかしこれは以上の調査によって明確に否定される。螺髻梵志たちは集団で生活していたとしても、それは決して組織的な集団であったとは考えられないからである。むしろ「法典」では集団を連想させる‘vināyaka’とか‘gaṇapati’という語がバラモン教からは「異端的」なものであったことを考えると、正統的なバラモン教の修行者であった三迦葉たちが、そのような生活をしていたはずはないということになる。

〔2〕それでは三迦葉エピソードが律蔵の「受戒韃度」に記された理由は何であったかといえ、それは螺髻梵志のようにすでに「出家」と見なされている修行者も、仏教に帰信するときには改めて具足戒を受けなければならないということを示したものと考えられる。すなわちバラモン教の修行者としての出家は夫婦でも許されるし、家との関係もそれほど厳格に断絶していたわけではないので、したがって仏教の求めるような厳密な意味では「出家」とは言えないからである。

またその具足戒が「世尊のみもとにおいて (bhagavato santike)」(Vinaya) とか、「於大沙門所」(『四分律』『五分律』) というような言葉をもってなされる場所からは、今までの信仰を捨てて世尊のもとで修行を励みますという意味の確認のような意味もあったであろう。「モノグラフ」の次号で取り上げる予定の摩訶迦葉は、仏弟子たちの中ではいくつかの面で特異な特徴を有する伝承を持ち、それは摩訶迦葉がどのように具足戒を受けたかが不分明であったからと思われる。すなわち摩訶迦葉は釈尊と同じころに螺髻梵志として出家して、いち早く釈尊の弟子になったものと考えられるが、その出家の仕方はパーリ聖典 (SN.016-011 vol. II p.220) では要約すれば、次のように描かれている。

摩訶迦葉は阿難に次のように告げた。「友よ、以前私は在家であったときに、このように考えた。家に住んでいては一向に清浄なる生活をするのは難しい、髪を剃り、袈裟衣をつけて出家しよう。そこで後に衣を裁断して僧伽梨となし、世間の阿羅漢の例にならって (yo loke arahanto te uddissa) 髪を剃り、袈裟衣をつけて家より非家に出家した。このように出家したとき、王舎城とナーランダールの中間の多子塔に坐っておられる世尊を見たので、そこで世尊に『尊者よ、世尊は私の師です、私は弟子です (satthā me bhante bhagavā. sāvako ham asmi)』と言った。そのように申し上げたとき世尊は『カッサパよ、心から弟子たることを具足していることを知らないで知ったという者や、見ないで見たという者は頭が割れるであろう (yo kho Kassapa evaṃ sabbaṃ cetasā samannāgatam sāvakam ajānaññeva vadeyya jānāmiti, apasaññeva vadeyya passāmiti, muddhā pi tassa vipateyya)。しかしカッサパよ、私は知って知ったと言い、見て見たと言う (aham kho

Kassapa jānaññeva vadāmi jānāmīti, passaññeva vadāmi passamīti)』と言われた。そして慚と愧に住せよ、善なる法を聞け、と教誡して去っていかれた。私はその第8日目に智を生じた」と。

おそらくこれが摩訶迦葉の釈尊のもとでの出家であって、これは通常の善来戒や三帰戒でなかったことは明らかである。そこで『十誦律』はこれを特別に「自誓受戒」と言っている。要するに『十誦律』はこれも正当の具足戒として認めているのであるが、他の律ではこのような具足戒法は認められていないから、後に摩訶迦葉の比丘性が疑われることになり、そこでその正当性を保証するために、半座を譲ったり、糞掃衣を交換するなどの伝承が生まれるようになったものと考えられる。

法臘が唯一のヒエラルヒーになる仏教サンガの中では、このようにすでに出家している者も、仏教に帰信するときには改めて具足戒を授けて、その時期を確定しておかないと問題が生じるので、そこで三迦葉の出家具足エピソードを説くことによって、バラモン教あるいはその他の宗教で出家していた者も、釈尊の弟子になるときは改めて具足戒を受けなければならないということを示したのであると考えられる。もしこのような推測が許されるとするならば、摩訶迦葉は三迦葉よりも先に釈尊の弟子になっていることになる。

後には外道の信者であった者は4ヶ月の試験的な仏教での出家、すなわち別住をしなければならないと定められた。しかし螺髻梵志は特典としてこれを免除されたが、この特典あるいは摩訶迦葉や三迦葉のケースがあったがゆえであると考えられなくもないであろう。

[3] おそらく三迦葉エピソードが「受戒韃度」に取り上げられたのは上記のような理由であったであろうと考えられるが、しかしそれだけでは三迦葉のエピソードが異常に長い理由にはならない。次にこれについて考えてみたい。

[3-1] そこで思い出されるのは「受戒韃度」のもう一つの主題である。すなわちそれは「サンガ形成史」という主題であって、このような視点で読むときには、バラモン教と対決して、これを克服するということが決定的要素であったということである。それは前節で紹介したように、「律蔵」の規定が仏教の個別化を図るために、いかにバラモン教の修行者を意識して作られたかということを考えれば、思い半ばを過ぎるであろう。要するに三迦葉エピソードは、釈尊教団がバラモン教とは異なる独自の一步を踏み出したということを示すという意図があったということである。換言すれば事実上ここに釈尊教団・仏教教団がはじめて成立したのである。

[3-2] それは次のような事を考えることによって納得されうるであろう。

『パーリ律』の「受戒韃度」ではその描く仏伝の中で、三迦葉が登場するまでにバラモンと関係するシーンは二つしかない。一つは成道直後の傲慢なバラモンであって、ここでは釈尊は真のバラモンとは何かということウダーナで説くだけで、問答すら交わしていない。伝統的なバラモン社会の中で新興宗教として出発した仏教が当面する一番の問題は、そのバラモン宗教との格闘のはずであった。しかしこの第一幕では、釈尊はまだ正面からそれと対決する姿勢を見せていないのである。

おそらくこれは最初期の仏教のバラモン教に対する姿勢を象徴的に物語っているのであって、釈尊は最初はバラモン教に真正面からぶちあたる考えはなかったということ物語るで

あろう。しかもこの時点ではまだ釈尊は法を説く決心すらされていなかった。

しかし釈尊の悟られた悟りを世間に弘めるためには、このバラモン教と対決しこれを乗り越える必要があった。したがっていずれはこれを打ち破らなければならなかったわけであるが、当面はそれが難しかったので願望の形で、あるいはあるべき姿として、そのバラモン教から三顧の礼をもって迎えられる日が来ることを望み、あるいは来ることを期待して、あるいは後世の仏教徒たちが現実にはそうではなかったけれども、それを象徴的に表わすためにバラモンの拠り所である梵天を登場させて、その勧請という伝説を作り上げたのであろう。だからこの伝説はむしろ歴史的な事実というよりは、釈尊ないしは後世の仏教徒の願望がこのような形で表現されたのである。

[3-3] そして次にバラモンが登場するのが、この三迦葉ということになる。念のために振り返ってみると、梵天勧請の後に登場する人たちは、アーラーラ・カーラーマとウツダカ・ラーマプッタ、ウパカ、五比丘、ヤサやその4人の友人、50人の友人たち、ウルヴェーラーに帰る途中の30人の賢衆である。

ウパカは邪命外道とされているから沙門の仲間であって、おそらくバラモンではないであろう。ヤサは族姓の子 (*kula-putta*)、長者の子 (*setṭhi-putta*) であって、これもバラモンではないであろう。当時の新興勢力として力をつけてきた商人階級に属したのではなかろうか。彼の友人たちも長者・随長者の族姓の子 (*setṭhānusetṭhinam kulānam puttā*)、旧家・随旧家の族姓の子 (*pubbānupubbakānam kulānam puttā*) と呼ばれているから、同じ階級に属したのではないかと思われる。そして賢衆もバラモンと呼ばれていないがゆえに、バラモン階級に属する人たちではなかったものと考えられる。

[3-4] したがって「受戒韃度」では、螺髻梵志である三迦葉がバラモン階級に属する者としての最初の弟子ということになる。しかも彼らは単なるバラモンではなく、バラモン階級から出た宗教者であった。そのバラモンの宗教者を打ち破って弟子とすることは、釈尊が自分の悟った法を布教しようと決心をされたとき以来の最大の課題であった。

その課題を達成するということは、おそらく並大抵のことではなかったであろう。それは日本に仏教が初伝されたときの混乱を考えれば容易に想像できる。したがってそれ相応の時間も要したであろう。この軋轢と時間を「受戒韃度」の三迦葉のエピソードの長さ、神通力を駆使するという異常さが象徴しているのではなかろうか。

[3-5] 「受戒韃度」に三迦葉のエピソードが長々と叙述され、しかも後には律によって禁止された (1) 神通力を用いるという非常手段があえて使われているのは、伝統社会の宗教を打ち破って、釈尊の教えが受け入れられるに至るエポックメイキングな因縁を物語ろうとしたものと解釈することができる。

この後で、王舎城の人々は釈尊と迦葉のどちらが師であるのかという疑問を抱いたというエピソードは、それでも一般社会においては、沙門教である仏教がバラモン教に打ち勝ったという事実がなかなか認識されにくかったということを物語るであろう。

(1) *Vinaya* 「小事韃度」 (vol. II p.110)、『四分律』「雜韃度」 (大正 22 p.946 中)、  
『五分律』 (大正 22 p.170 上)、『十誦律』「雜法」 (大正 23 p.268 下)

#### 原始仏教聖典におけるバラモン修行者

のページを割く結果となった。そこで基本的な過誤のあることを恐れて、筆者が勤務する東洋大学の同僚の沼田一郎講師にチェックをお願いした。記して謝意を表す。